牛の肥胖細胞腫

帯広畜産大学家畜病理学教室出題　第12回獣医病理学研修会標本 No.176

病畜は6年3ヶ月齢，ホルスタインの牝牛である。発病発見当初，A家畜診療所で食道梗塞と診断し治療が行なわれた。それから約1ヶ月後，食慾絶廃，下痢を発して再び診を乞う。当時赤血球数650万/㎣，白血球数8,600/㎣であったが，塗沫標本で好酸球の異常な増数（71.2%）が注目された。その後一般症状極めて悪化し予後不良と診断して屠殺され，一部の材料が私共の所に送付されてきた。

肉眼所見　食道後位において長さ数10㎝，厚さ数㎝～10㎝にわたる著しい肥厚があり，割面は帯緑黄色を示し，一部に石灰沈着，膿瘍形成があった。食道以外では腎の皮質に粟粒大～桜実大の帯緑黄色の結節が多発し，同性質の小結節病巣は肺の小葉間結合織および心内膜下に散見された。

組織所見　食道における病巣は，上皮層から漿膜に至るその構造はほぼ識別できるが，特に粘膜下織が異常に幅を増している。全層にわたって強い好酸球浸潤が目立ち，主として粘膜下織においては1～数個の類円形の比較的明るい核を持ち，顆粒を含む豊富な原形質を持った大型の細胞が瀰漫性にあるいは集団をなして存在する。この細胞の顆粒はpH4.1のToluidinblau染色やGiemsa染色で異染性を示し，alcian blue染色，PAS反応陽性である。しかしSudanⅢやPeroxydase反応は陰性である。また，Azan染色，嗜銀織維染色標本の所見では細織維形成能に乏しい。このような所見は肉眼で認めた心内膜下，腎皮質および肺間質の病巣でも同様である。

以上の組織所見から，この腫瘍性の細胞は肥胖細胞系のものと考えられるが，このような病は犬，猫において肥胖細胞腫として広く知られ，特に猫ではこの腫瘍性の細胞がしばしば末梢血に出現する傾向があるとされている。牛における本症の報告は比較的少ないが，私共は，数年前も同様の症例に遭遇しているし，それ程稀なものではないように思われる。

診断　動物種を問わずこの種の病にMastozytom，Mastzellentumor, Mastzellensarkom, Mastzellenretikulose, sog. Mastozytom, Mastzellenleukoseなどと，その各々に意義を持たせた診断名が用いられているが，私共は今回の材料について牛のMastzellentumorと診断した。

写真1　食道粘膜下織　H.E.　×40
　　2　同上↑印部拡大　Toluidinblau　×1,000